

## 産業経済研究所 50周年に寄せて

経済学部附属の《産業経済研究所》は、昨年10月に50周年を迎えました。50周年というのはとても大きな節目で、非常に喜ばしいことだと思います。

通常、研究所というと学部から切り離された別組織で、研究活動に主眼を置いた組織を指すことが多いと思います。明治学院大学では、《キリスト教研究所》や《国際平和研究所》などがこのタイプの研究所でしょう。一方、明治学院大学では各学部がそれぞれの研究所を持っています。

《産業経済研究所》、私たちはみな《産研》と呼んでいます。これは産業や経済に関する研究所であるとともに、経済学部の教育を支える《学部事務室》を兼ねています。1966年に設立された当初、《産研》がどういう意図で作られたのか、設立当初の産研がどんな性格だったのか、2000年に経済学部に移ってきた私にはよく分かりませんが、現状を見るかぎり、産研は《経済学部・学部事務室》の色合いが濃いと思います。

学部が発展していくためには、教育と研究が車の両輪のようにうまく機能してゆかないといけません。この両者を陰で営々と支えてきたのが《産研》です。現在の経済学部は明治学院大学で一番大きい学部になりました。経済学科、経営学科、国際経営学科と3つの学科を持ち、教員数50名、一学年の学生定員655名で、教員数も学生数も一番多い学部です。ということは学部事務室、つまり《産研》の仕事量も最大規模だということでしょう。

《産研》の組織は、産研所長（1名）産研主任（2名）助手（1名）それに数名の教学補佐や特別に任用した職員からなっています。産研所長は学部長がこれを兼ねることになっており、このことは産研の活動がいかに学部の活動と不可分であることを示しています。実際、教員の中には、学部と産研をほとんど同一視している人もいるのではないのでしょうか。

現在、《産研》の仕事は大きく4つに分けることができます。

- 1 経済学部の予算執行
- 2 経済学部教員の教育活動のサポート（ゼミナール活動等）
- 3 経済学部教員の研究活動のサポート（紀要の発行や研究プロジェクト等）
- 4 経済学部が任されている物品の管理

いずれも学部の運営を円滑に進めていくには必要不可欠な業務です。しかも、どれかに力点を置くのではなく、バランスよくこれらを進めていかななくてはならないところに《産研》という組織の難しさがあると感じています。少人数でこれだけの仕事をこなしてこられた歴代の教学補佐の

方々、そして長いこと助手の立場で《産研》の業務遂行に尽力されてきた梅木さんに、御礼を述べたいと思います。

経済学部の業務内容が多様化するにつれて、今後《産研》の在り方も少しずつ変わっていくのかもしれませんが。《経済学部・留学オフィス》は、ある意味では《産研》の機能を一部独立させたものと言えるでしょう。これは2年ほど前から国際経営学科のカリキュラム留学制度が始まったことによるものです。《産研》には、今後も置かれた状況に柔軟に対応して、明治学院大学の最大学部である経済学部をしっかりと支えていってほしいと思います。

《産業経済研究所》の50周年は、正確には2016年10月1日でした。実際にこの日を過ぎてから、どんな記念行事をするのかを、現在の産研主任の先生方に色々と考えていただき、今回は『紀要——特集号』を刊行することにいたしました。上に書いたような理由で、《産業経済研究所》の活躍を見ようとすると、自然と経済学部のこれまでを振り返ることになってしまいます。

今回は、名誉教授の先生方が数名、記事を寄せてくださいました。また、斉藤都美先生による記事を読めば、過去の《産研》の活動についても知ることができます。《産研》の今後を考えていく上でのご参考になれば幸いです。

今後も《産業経済研究所》そして経済学部の発展のために皆様のお力を貸していただきますようお願いいたします。

経済学部長（産研所長） 村田 玲音